

2025.4

春夏

No.120

思文閣出版

鴨東通信



❖ 日常語のなかの歴史 33

りょうけ【良家】

◆ 金玄耿

❖ ていたいむ

「幻の源氏物語絵巻」をもとめ続けて

◆ 佐野みどり

◆ 小嶋菜温子

◆ 高橋亨

生々流転

— モーリシャスのアニールのこと —

◆ 鈴木英明

知の名所を味わう

— トリノと京都の本をめぐって —

◆ 赤松加寿江

「秘伝」と江戸時代の医学

◆ 海原亮

私の出版顛末記

◆ 石川義宗

❖ ミレニアル世代の研究レシビフ

モデルはなぜ蘇ったのか

◆ 中尾暁

❖ 鴨東通信120号記念 特別対談

共同研究のつくりかた

◆ 高木博志

◆ 並木誠士

佐野みどり・小嶋菜温子・高橋亨編

「幻の源氏物語絵巻」をもとめて

——十七世紀、絵巻の時代と古典復興

5月刊行予定

A4判横綴じ・函入／五〇〇頁(予定)／
定価 三八、五〇〇円

「源氏絵」の歴史のなかでも際立つ個性を有している「幻の源氏物語絵巻」。黄金をふんだんに使用した豪華な造りに加え、他の源氏絵のパターンとは一風変わった場面選択が見られる点でも注目を集めている。現在までに存在が確認されているのは20巻弱、完本で揃っていたとすれば、全体で200巻を超すものであった可能性がある。誰がどのような意図のもとで、このような絵巻を制作しようとしたのか。詞書染筆者の問題も含めて、江戸時代初期の文化史・政治史・経済史的な状況を見渡しての検証が必須となる。日本文化史のミッシングリンクというべきこの豪華絵巻の謎に、豊富なカラー図版と国文学研究者・日本美術研究者15名の論文でもって迫る。

【目次】

図版編(掲載予定作品)

桐壺三巻 個人蔵／帚木一巻(部分、ニューヨーク・パブリックライブラリー) スペンサー・コレクション蔵
／空蟬残欠巻(石山寺蔵)／夕顔 断簡(個人蔵)
／末摘花上巻(石山寺蔵)／末摘花中・下巻(部分、ニューヨーク・パブリックライブラリー) スペンサー・コレクション蔵
／葵六巻(京都国立博物館蔵)／葵断簡「葬礼図」(メトロポリタン美術館蔵)／賢木詞書(部分、個人蔵)／同・絵 断簡(個人蔵／メトロポリタン美術館蔵) ※詳細はお問い合わせください

論文編

「序にかえて」「幻の源氏物語絵巻」と「ものまざれ」——「注釈的絵画」にみる再創造と文学／美術史学の可能性 (小嶋菜温子)

第一部 「幻の源氏物語絵巻」の復元にむけて

盛安本源氏物語絵巻(「幻の源氏物語絵巻」再考

(佐野みどり)

*

物語絵画としての盛安源氏物語絵巻——「源氏物語」の年立を通じた一考察 (エステル・ボエルル)

源氏物語絵巻 桐壺—幻の「源氏物語絵巻」巻頭帖としての意義 (吉川美穂)

京都国立博物館蔵「源氏物語絵巻」葵から—メ

トロポリタン美術館蔵「葬礼図」の定位とあわ

せて (松岡知華)

パーク本「源氏物語絵巻」賢木巻断簡から (稲本万里子)

「コラム」「幻の源氏物語絵巻」の詞書と絵面化

—物語全文を書き写すことの意味 (青木慎一)

スペンサー・コレクション蔵「幻の源氏物語絵

巻」三巻 (渡辺雅子)

「特別寄稿」石山寺所蔵 空蟬残欠巻 (田中水萌)

第二部 十七世紀、絵巻の時代と古典復興

九条家の源氏学と絵画 (高橋亨)

「幻の源氏物語絵巻」の製作背景追考—九条家・

賀茂社家の人々とその環境をめぐる(海野圭介)

鹽電神社蔵「絵詞保元・平治」をひもとく—杉原

盛安・杉原本と「保元・平治物語絵巻」(鈴木彰)

「幻の源氏物語絵巻」の「空蟬」—中世・近世の

「源氏物語」享受とその展開 (水谷隆之)

室町時代やまと絵と源氏絵の再生—大画面の出

現と土佐光信・光茂・光元による新展開(高岸輝)

「コラム」近世絵巻の研究に向けて (若杉准治)

「結び」本書の成果と今後の課題 (高橋亨)

*

表示価格は税込

日常語のなかで、

歴史的語源や

エピソードを取り上げ、

研究者が専門的視野から

ご紹介します。

日常語の なかの歴史 33

りょうけ

良家

少し古めかしい表現かもしれないが、「良家の子女」とは、教養があり、余裕のある暮らしができる家庭で生まれ育った子どもを指す。ただ、その家の「良さ」の基準は人によって異なるかもしれない。昔も今も、その点は変わらない。

古代中国の文献における「良家」は、①賤民に対する良民の家、②経済的には富裕層、政治的には官僚になる有力な名門という二つの側面を持つ。新羅・

高麗の歴史を扱う史料にも「良家」「良家子女」の語が見られ、それらの用例には同じ二つの側面が現れている。

一方、古代日本においては、良民の家としての「良家」という表現はあまり見られない。『日本書紀』大化二年（六四六）三月甲子条には「良家大夫」の語が見えるが、北野本『日本書紀』には「良家大夫」の「良」に対する古訓が「タカキ」とあり、「良さ」の内容は地位の高さに関連していることが分かる。律令制では地位の高さは官位に表れる。『日本紀略』延暦一二年（七九三）九月丙戌条にも「見（現）任の大臣、良家の子孫」とあって、大臣

という官職との関わりが想定される。天長四年（八二七）六月一三日太政官符（『本朝文粹』所収）に引用された都腹赤牒には「良家」が「三位已上を謂ふに似たり」とあり、三位という位階が基準になっている。また平安時代、南都（奈良）の寺院社会では僧侶の身分が「良家」と「凡人」に分けられたが、この「良家」も貴族の家に当たる。

ところが、のちに「良家」の上にさらに高い身分の概念が現れ、比較的低いランクの集団に「良家」の語が用いられるようになる。中下級貴族の諸大夫層や源平の京武者は「良家子」と呼ばれ、室町時代の寺院社会では摂関家出身の「貴種」を除く大臣子弟の僧侶が「良家」とされた。

今も言葉は必ずしも厳密に定義されて使われてはいない。ましてや古代・中世の史料から言葉の一貫した基準を求めるのは、どれだけ資料を博搜してもなお難しい。それでも、個別の用例を追いかけてできるだけ一般的な傾向を把握すれば、当時の社会の解像度を上げることができるだろう。

（金玄耿・韓国明知大学校人文大学助教授）

ていーたいむ

佐野^{さの}みどり
〔國華〕主幹、学習院大学名誉教授

「幻の源氏物語絵巻」をもとめ続けて

小嶋^{こじま}菜温子^{な お こ}
〔立教大学名誉教授〕

高橋^{たかはし}亨^{と お る}
〔名古屋大学名誉教授〕

十七世紀に制作された豪華源氏物語絵巻の謎に迫った『幻の源氏物語絵巻』をもとめて』を編集された三名に、美術史と国文学、それぞれの立場からみた絵巻の魅力をおさします。

■謎多き絵巻の実態を追いもとめて

——刊行のきっかけについて教えてください。

小嶋…延べ一〇年近く、わたくしに推進した複数の研究プロジェクトの締めくくりとして、二〇一三年に立教大学で国際シンポジウム「幻の源氏物語の絵巻をもとめて・続」を開催いたしました。一五名の登壇者によって白熱した議論が六時間にもわたり、重要な新しい視点が相次いで提示されましたので、これは本にまとめねばならないと思っただのがきっかけです。それぞれ源氏絵

／源氏物語の権威であられる佐野さん・高橋さんに、二〇一一年一三年度のプロジェクトで連携研究者としてご協働いただいた経緯から、共編をお願いしました。

——なぜこの絵巻は「幻の絵巻」と呼ばれているのでしょうか。

小嶋…まず、国内外に散らばる残り方からして不思議ですよ。完本の形で残っていないので全容が不明で、実態が掴めない。大部で豪華な絵巻にしては制作事情も謎で、絵師の名前が残っていないものの不詳です。『源氏物語』五四帖のうち、どこまで絵巻に描かれたのかも分からない。全てが完成していたのであれば二〇〇巻に及ぶ計算ですが、実際に確認されているのは二〇巻程度で、賢木までの一〇帖分が、飛び飛びに残る状態です。そうした現状から、当面は「幻の」と冠するほかないかと考えました。



佐野氏

佐野.. 本当に謎めていますね。精緻な描写の画面は、とても美しく、眩しいほどの豪華絵巻です。詞書は『源氏物語』のテキストの全文を書写していて、絵には金や発色の良い顔料がふんだんに使われています。初めて拝見した時には実際の制作年代がわからなかったのですが、その美しさは想像を超えるものでした。当時、私たちが一七世紀の絵巻や源氏絵に対して抱いていた印象とはだいぶ異なっていましたから、もっと後の時代に制作されたものだろうと思っていました。

高橋.. 研究が進む前は、皆そう思っていましたね。

小嶋.. シンポジウムも更なる発見を期待する場となりました。

—— **その後実際に様々な所で残欠巻や断簡が見つかりました。**

佐野.. 当初は、ここまで出てくるとは思わなかったですね。賢木の断簡は出てくるかなと思いましたが。

—— **この絵巻が「盛安本」とも呼ばれているのはなぜですか。**

高橋.. この絵巻の制作プロジェクトを企画したのが杉原盛安という人物で、九条家の家司とのことです。

幸家は、桐壺巻本文冒頭の十五行を書き、絵巻の制作に絡んでいます。九条家が作らせたと単純に言うことはできません。

小嶋.. ただ、偶然かどうか、関白・九条幸家の祖父（九条植通）が源氏物語注釈書（『孟津抄』）の著者であったのは事実です。盛

安については、本書で海野圭介さんが多角的に究明されています。これまでは刀剣や軍記物などの色々な書物を手掛けている一方で実態が掴みにくいところもありましたが。

佐野.. 愛書家であり、自分が手掛けた書物を神社に奉納したりしています。それだけの活動ができる経済基盤が不明で、九条家の家司としての実態はあまりなかったのではないかと思います。

—— **どの巻にも共通する特徴はありますか。**

佐野.. 饒舌な画面の作り、画中画への執着などは共通する所です。また、この絵巻は海外で「黄金の庭絵巻」と呼ばれているのですが、美しい庭の描写は特徴的です。物語の筋にあまり関係なく庭が延々と描かれます。昨年に石山寺さんで発見された空蟬巻には庭の描写が無いのですが、後の時代に絵を同じサイズに揃えるために切ったのではないかと想像します。そのため、元の状態や物語の解釈がどうであったのか判断が難しい残欠巻です。

それから、雲や地面などに金がたくさん使われていますが、この部分に「檀紙を使っているのかな」と思わせるほど凸凹した、エンボス加工のような横筋が必ずあります。板か何かの上に置いて擦り出して模様を出すような磨き付けをしているようです。

高橋.. やはり美しい装飾料紙に書かれている詞書について言いますと、フルテキストであることが重要です。通常の源氏絵の詞書は、全文ではなく本文の一部、ことに和歌を詠んでいる部分を抄出して絵画化するのが普通です。この絵巻は物語全文ですから、文章が不自然な位置で切れて絵が挟まっていたりしますが、青木慎一さんが今回の本の中で、物語の文脈と絵の位置関係を説明して



高橋氏

くれています。詞書の染筆者は多様ですが、美しい装飾料紙に書かれた書のスタイルは共通しています。

■海外で発見される断簡

高橋…この絵巻の魅力の一つに、海外に流出して分散した絵が発見され、注目されたということがありますね。

佐野…私には「眩しすぎる」と感じられた輝くような岩絵の具による丁寧な描写、絵の饒舌さが、海外の方には非常に魅力的だったのではないのでしょうか。私たちは時代がかった古色の方が有難いと、つい思ってしまうですが。

高橋…その傾向はありますね。徳川本・五島本の源氏物語絵巻（どちらも国宝）が典型で、その復元模写よりも、原本の古色の方が美の基準としてすり込まれている。

——近年相次いだ、この絵巻の新発見について教えてください。

佐野…二〇一九年にパリで夕顔巻の断簡が発見されましたが、元々は「桐壺の断簡が出てきた」という話だったのです。ところが実際に拝見しましたら、一目見た瞬間に夕顔だとわかりました。持ち主は日本美術のコレクションを始めたばかりの男性でした。

賢木巻については、一九八〇年にパリのオステイエ画廊さんで絵巻の絵部分だけを切断して額装して売り立てられたのですが、これらの散逸した断簡を、各方面を探索して見つけ出されたのはエ

ステル・ボエールさん（現、ギメ東洋美術館）です。

海外の断簡ご所蔵者の皆様は、マントルピースの上や寝室に飾って、それぞれ楽しまれていました。特に印象的だったのは、ご所蔵者さんがたいへんな愛猫家のお宅です。この断簡の表面には猫ちゃんの引つ掻き傷がいっぱい入っています。私が見せていただいた時にも幅の狭い額縁の上に猫が二匹も乗っかっていて、ガラス等で保護されていまして、「ああっ！」と思いました。それだけ生活の中に溶け込んで、愛されていたということでもありますね。

小嶋…二〇二一年に発見された賢木巻の詞書は六巻丸ごとで、驚きの朗報でした。どのような経緯で見つかったのでしょうか。

佐野…スイスのオークションにかけられていたものを、日本の方が買い取られて連絡をくださいました。切断した当時の生々しい状態で残ったので「まさか！」という思いでした。額装されて売られた絵と違って、詞書は特に海外では重要視されない傾向にありますから、絶対に出てこないだろうと思っていました。売立に関わった方も「蚤の市で売ったんじゃないかしら」と言っていましたから、探す手がかりもありませんでした。どうも、画廊で売り立てた当時に、絵を複数枚買った方に「おまけ」として付けたようです。

■絵巻が埋める研究史の空白

——本書の副題は「十七世紀、絵巻の時代と古典復興」です。

佐野…私が初めてこの絵巻（末摘花巻）を拝見したのは一九八七年に

サントリー美術館で開催されたスペンサー・コレクションの里帰り展で、展示風景まではっきりと覚えているのですが、当時はこの絵巻が放つ輝くような美しさがすぐに消化できなくて、別の作品の調査もありましたから、通り過ぎてしまった。今でこそ、わたくしに「絵巻の時代」と言ったり、高岸輝さんが「一七世紀は隠れた絵巻の黄金時代」とおっしゃいますが、そのような認識は、八〇年代にはまだなかったのです。

その後、エステルさんの断簡探索に巻き込まれるような形でこの絵巻について考えていく中で、「そういえば、東照宮縁起絵巻とか太平記絵巻とか、実はこの時代に豪華な絵巻がたくさんあるじゃないか」と、気づかされることになりました。当時はまだ、三の丸尚蔵館さんの酒伝童子絵巻などもほとんど注目されていませんでしたから。

高橋…それまでの源氏絵の絵師といえば、狩野派とか土佐派とか、名の知られたグループの作品を中心に考えられていた。この絵巻が出てきて、特定の絵師グループに限定できない可能性もあるということがわかってきましたね。

小嶋…美術史学と同じような驚きと反応が国文学の方でも起こったといえます。日本文学史上、江戸初期というのは公家文化と武家文化の混ざり合う時代から大衆化の進む元禄文化が花開く過渡期に当たり、文学状況も様々に流動を余儀なくされた時代です。源氏物語の享受史においても、一七世紀後半には印刷・出版文化が発達して様相が明確化するのですが、前半は注釈書も含めて享受の実態がなかなか見えづらく論じにくいところがあって……。

高橋…この絵巻をきっかけに、その辺りを再検証することになりましたね。徳川家康が源氏を名乗ったことが武家側の出発点にあり、後水尾天皇を中心とした公家側の王朝文化の伝統と絡むわけですが、連歌や俳諧を媒介にして、より広い庶民的な階層の文化を形成してくる。

小嶋…わたくしに「注釈的絵画」として、この絵巻を一七世紀前半の堂上（公家）流の注釈史の流れのなかに位置づけていますが、本書ではその拙論を受けて水谷隆之さんが空蟬をテーマに「俗文芸との繋がりを」を解明しています。この絵巻には、登場人物のリアルな心情を絵で語るような臨場感があって、世俗的なわかりやすさがあります。このような源氏絵のあり方は特異で斬新ですね。また盛安本が作品・ジャンルを超えて制作されたことは鈴木彰さんが、盛安と堂上文化の繋がりは海野圭介さんが本書に詳述されています。寛永文化から元禄文化への移行期に、この絵巻が屹立したことの意味は深く重い。源氏物語の享受史からしても、こんな傑物が眠っているとは誰しも思っていなかったでしょう。この絵巻は江戸初期という複層的で混沌とした時代の生み出したモンスター的な文化遺産であり、それまで見えにくかった一七世紀前半の「ミッシング・リンク」を埋める貴重な資料だと言えるでしょう。

■つながる点と点

佐野…美術史学の方では石山寺さんの未摘花巻は早くから一七世紀半ばぐらいではと言われていましたが、なにしろ作品の全体感

がわからなくて。

高橋…はつきりと制作年代が判明したのは、徳川美術館に寄託された桐壺三巻についての、吉川美穂さんの画期的な論文によってですね。

佐野…惜しみなく情報を開示して下さった。桐壺巻が、徳川文化に精通しておられる館の吉川さんに発見されたことは大きいですね。

小嶋…吉川さんのご論で、それまで点と点だったものが一気に繋がりが、この絵巻の制作背景として一大プロジェクトの輪郭が浮かび上がったのでした。そもその起点は、エステルさんがパリを拠点として「源氏絵」データの収集を進めた二〇〇六年に、わたくしどもが旧パーク・コレクション（現在メトロポリタン美術館所蔵）で賢木巻の断簡（二図）を見出したことです。パークさんでは著名な「源氏絵」を尻目に国文学的な関心から、あえて断簡を見せていただいたのですが……目の前に現れた絵の凄さに息を呑みました。文学的な考察は自らの課題として、絵の解析を同行の稲本万里子さんにお任せし、のちに稲本さんの仮説（後水尾院・京狩野が関与）がNHKスペシャルの放映でも話題を集めましたよね。

NYでの調査はメトロポリタン美術館（当時）の渡辺雅子さんに全面的にお世話になり、それが本刊行の礎となっています。同館蔵品では、桐壺巻の断簡かとも言われていた「葬礼図」が実は葵巻の断簡であったという大発見をされたのは松岡知華さんです。松岡さんは若杉準治さんのもとで葵六巻（京都国立博物館蔵）を研究されており、我々のプロジェクトの一員としてNY調査をお願い

しての成果でした。たまたまエステルさんの大学（NYU）と立教大が提携校でシンポジウムを共催するなかでホットな情報交換ができたこと等、この絵巻に関する発見は、不思議なご縁の連続でした。全て、この絵巻が持つ力のなせる業という気がします。

——**小嶋先生にも「必要なご縁を引き寄せる力」があることは、担当編集の私がこの眼で何度か目撃しております。ついでに申しますと、昨年、高橋先生と私が喫茶店で「刊行までに、まだ新発見があるかもしれないですね」とお話ししていたら。**

高橋…直後に空蟬巻が出てきましたね。それも源氏の聖地石山寺さんから。これも吉川さんが編集チームに教えてくださった。昭和六〇年代に自社のカタログに載せていた思文閣さんにとっては、再発見という因縁ですね。

■国文学と美術史、協働の可能性

——**国文学の先生は、この絵巻の絵をどのように見ますか。**

小嶋…国文学では、文字表現の想像力の範疇で絵を捉えますが、この絵巻は文学的な意味でも佐野さん曰くの「饒舌」を感じますよね。定型的・類型的な源氏絵とは違って、「絵が語る」とでも言いましょうか。この問題は、御伽草子（奈良絵本）や縁起絵類の「絵解き」研究が先行していますが、源氏物語関連では徳川本・五島本源氏物語絵巻が顧みられる程度でした。が、この絵巻には、語りかける絵としての傾向が強く、「注釈的絵画」とわたくしに呼ぶ所以です。

高橋…源氏物語の和歌の享受と絵が結びついているのが源氏絵の

伝統的な原則でした。だから、そうではない、散文的リアリズムというか、物語的な注釈をするかのような源氏絵が出てきて、小嶋さんはショックを受けた。

小嶋…源氏絵は綺麗事の世界だという固定観念を打ち砕き、后妃藤壺の密通（もののまぎれ）をもビビッドに描く、この異色の絵巻は文学／美術史学の垣根をも揺るがす魅力に満ちていますよね。

佐野…物語がどう動いて登場人物の心情がどうだったのか、絵にセリフを被せなくなるような生々しさがあって、まるでアニメーションのようです。

高橋…通常の源氏絵には無い、出産や死、不義密通などの場面も描かれています。今回、書籍に初めて掲載される葵巻では、六条御息所が焚きしめられた護摩の匂いを消そうとして、下着姿で髪を洗う恐ろしいその場面まで描いている。若杉さんのご紹介で以前実見させていただいた時の感動は、忘れられない記憶です。

最初の源氏物語国際会議は一九八二年にインディアナ大学ブルミントン校開催で、佐野さんとお会いしたのですが、美術史と国



小嶋氏

文学が本格的に交流を深めたのは、二〇〇〇年代に入ってからでしょう。二〇〇八年に京都で源氏物語千年紀の国際フォーラムが催され、まさに学際的な研究が集結しました。個人的には、その年三月にはダブリンのチェスタービーティ図書館での調査、

二〇〇九年にはワシントン会議、ニューヨークでの調査、二〇一〇年のフランクフルト工芸美術館の物語絵調査の後、ウィーン工芸美術館では、「淡彩源氏物語画帖」を発見しました。こうした国際化とともに、国文学と美術史をはじめとする学際化が進行したのです。

■汲めど尽きせぬ源氏物語の魅力

——大河ドラマ「光る君へ」は紫式部と藤原道長の秘めた恋を描きました。現代でも、源氏物語は様々な形で読み継がれています。

高橋…源氏物語は単なる色恋、不倫を描いた文学ではないのです。ギリシャ悲劇オイデュプス王のような王権、また思想・宗教小説ともいえます。九条幸家の祖父の植通は、最高の書物を問われて源氏物語、歌の本も源氏、六〇年読んでも飽きないと言ったそうですが、まさしく同感です。

佐野…私は、現代ということでは、漫画『あさきめめし』や『大擲源氏物語 まろ、ん？』といった現代版「絵入源氏物語」が拓いた源氏読者への共感があります。また、室町から桃山期の白描源氏物語絵巻作例も、自分たちの源氏物語をという、源氏愛読者の女性たちの思いが感じられて、プリミティブな画面が愛おしくなりません。

小嶋…女性のみならず男性読者も巻きこんでの、いわば判官びいき的な悲劇志向が、燦然たる「源氏絵」の歴史の原動力でもありましようか。日本文化の深奥に触れる想いすらいたしますね。

生々流転

——モーリシヤスのアニールのこと

インド洋に浮かぶモーリシヤス島は長らく無人島だった。それが一七世紀以来、蘭仏の東インド会社による占拠と開発、ナポレオン戦争後のイギリス帝国による砂糖生産地としての更なる開発、そして独立という道を辿ってきた。この間、ヒトの到達前からこの島にいたドードーは入植者によって食べ尽くされ、労働力としてマダガスカル島やアフリカ大陸から奴隷が、イギリス帝国領有後に奴隷制が廃止されてからは特にインド亜大陸より契約労働者がこの島にやってきた。

アニールの曾祖父もインドのビハールからやってきたのだという。この島の治安を守る仕事をしている彼は現在、五〇代半ば、兄弟姉妹は全部で八人。幼くして亡くなった兄弟ひとり、そして嫁いだ姉妹ふたりを除いて、この島の東海岸から少し入ったところにある村の祖父が購入した土地に、それぞれが家を建てて暮らしている。サイクロンで吹き飛んだのか、いまはもうないが、彼らの住む一角に入る道にはかつてその苗字を冠した通り名が記された標識があったという。

鈴木英明

アニールと妻のあいだにはふたりの息子がいる。長男は二〇代半ば、次男は二二歳になった。長男は現在、稼ぎがより良いオーストラリアで働いていて、ちょうど、私の訪問時に里帰りをしていたので、彼とも再会できた。そうそう、アニールとは、私の最初の訪問時にふとしたきっかけで仲良くなり、今年のはじめ、九年ぶり二度目の訪問時に久しぶりに再会した。

モーリシヤスでは、二月一日は「奴隷解放の日」で祝日だ。その日、島の南端で行われる式典に参加するのが今回の訪問の目的のひとつであった。タクシー運転手をしているアニールの弟に頼んで、会場まで連れて行ってもらった。式典は一時頃に終了し、再びタクシーに乗り込む。二日くらい前、アニールがこの日にピクニックに行こうと言っていたのを覚えていたのだが、どこに行くのかを聞きそびれていたことにふと気が付いた。そのことを弟に話すと、「兄貴たちのバスがもうすぐこっちに来るぞ」という。とっさにアニール一家が乗り合いバスのなか、ピクニックバッグでも膝の上に置いて車窓を眺めているイメージが湧く。

しばらくして、「あ、いた」とつぶやく弟の視線を追うと、思っていたのとだいぶ違う光景が目に見え込んできた。見覚えのある顔が次から次に楽しそうに大型バスから降りてくるではないか。見知らぬ顔もある。そばに寄っていくと、一族郎党、お隣さんまで三〇人超の大集団が海の見える公園に貸切の大型バスで着いたところだった。ピクニックバッグなんて可愛いものなんか、どこにもない。何十人分あるんだというくらいの大鍋にいっぱいいのびりヤーニというインド起源の炊き込みご飯、それに何種類ものおかずにおつまみ、夥しい数のラムやウイスキーの瓶が車内から続々運び出され、バスの後ろには無造作に氷と瓶ビールが詰め込まれていたドラム缶のようなポリバケツが鎮座していた。

大宴会が始まった。結局、宴会はその後、場所を二度ほど変え、最後は車内でモリシヤスの伝統的音楽セガの爆音に踊つての帰宅となった。家に着くころには年配者は爆音にげっそりし、私も含め若者は酒と踊りとバスの揺れでバスから降りても足元危うく、そして酒類はすべてなくなっていた。

アニールたちは親戚仲が良く、日々の食事を含め、何かにつが集まるのを知っていたので、今回もその一環かと思つたが、それにしてもバスを貸し切つたりして気合いが違つていた。アニールに尋ねると、今回は息子たちの世代が一切を取り仕切つたという。宴会の翌日は月曜日、そこからまた、いつも通りの時間が流れていく。ただ、アニールも妻も心なしに元気がない。だいぶ長い二日酔いかしらと思つてみると、ふと、彼が呟いた。「うちの息子、週末には帰っちゃうんだ」。なるほど、そういうことだったのか。

あの宴会はアニールの長男を囲むしばしのお別れ会だったのだ。モリシヤス島にやって来たアニールの曾祖父母はついにビハールには戻らず、この島に根を下ろした。そこから数えて彼の兄弟姉妹まで四世代がこの島に生きてきた。そしていま、アニールの長男は、オーストラリアに新天地を見出そうとしている。次男も近々、兄を頼ってオーストラリアに行くんだと嬉しそうに言っていた。

アニールのSNSは基本的にどこかへ行つた時の自撮りばかりだが、長男の出発の日だけは違つた。空港の見送り窓から撮つただろう出国手続きを終えた長男が笑顔で手を振る写真が添えられ、惜別と激励と子への愛情と色々なものが入り混じつた長い文章を投稿していた。

アニール一族について世代を跨いで俯瞰すれば、第五世代が再移民をしつつある、と書けば、それで充分なのかもしれない。事実、この島の若い世代は海外に活路を求める者が少なくない。あしたのお別れ会もごくありふれた光景かもしれない。それならば、そんなことを長々と書かず、どこへ何人、あそこへ何人と再移住の広がりや地図に示し、その背景を分析すれば良いのかもしれない。ただ、彼らに接し、その感情の機微に時折触れていると、そうした数字や地図では決して表現できないところに強く惹かれていくのだ。そこに迫ろうとするなかで、彼らの物語が決して他人事ではなくなっていく。自分自身やほかの誰かの移動に常に揺さぶられながら作られている私自身のそれとどこかで共鳴している気がするのだ。

知の名所を味わう

——トリノと京都の本をめぐって

世界で最も美しい書店をご存知だろうか。二〇一九年に英国紙『ガーディアン』が選んだのがアルゼンチンの「エル・アテネオ・グランド・スプレndeイト」である。ブエノスアイレスの中心街に位置するその書店は、一九一九年創業の劇場を改造した壮麗な空間で、手彫の木彫や、優美な曲線階段、ボックスシートもそのまま残されている。カフェとなったステージ上で本を片手にコーヒーを飲み、ドーム天井のフレスコ画を見上げると、劇場を新たな角度で体験できて実に楽しい。タンゴ劇場から映画館を経て、二〇〇〇年に現在の姿になったという。書店がコンバージョンの最終形になるとは、なんと素晴らしい文化土壤なのだろう。ホルヘ・ルイス・ボルヘスをはじめ、文学を愛するお国柄が忍ばれる。世界各地で書店が姿を消しつつあるご時世、土地の知の集積地である書店は、ローカルな食を味わうのと同じくらい、旅の訪問地としての魅力がある。どの傾向が充実しているのか、大学や出版社が近くにあるのかなど、本を探すふりをしながら、地域の文化傾向を読み解いていくのは面白い。そしてできることなら、本を買って近くの老舗喫茶店に入ってページをめくりたくなる。

赤松加寿江

イタリア都市史を専門とする筆者は、イタリアのあちこちで多くの書店を訪れてきた。独立系の書店がひとつまたひとつと店を閉じるたび、居場所を失う寂しさを覚えてきた。検索などしなくても待望の本を見つけ出してくれる書店の主人はどこにいったのだろう。都市の暮らしに根付いた「知の集積」を味わう喫茶店はどこにいったのだろう。そんな不安をかき消してくれる都市がある。それが北イタリアの都市トリノだ。

ピエモンテ州の中心都市トリノは、京都とおどろくほど似ている。古代ローマに遡る街路構成は碁盤目状で、航空写真を見比べても、トリノ王宮は京都御所に、ポー川は鴨川に、川向こうの丘陵は東山と同じに見える。サヴォイア家による歴史的な首都であり、一八六一年にはイタリア統一国家の首都となったものの、首都移転で政治的地位を失い、産業都市化をはかった点、目新しい雰囲気をも取り込む知的先進性をもつ点でも京都と共通している。それは「出版」と「喫茶」という営みに注目してみると一層明らかである。

一九世紀前半、イタリア国家統一運動の「リソルジメント」の

時代、トリノはイタリア出版界の中心地だった。イタリア王国初代首相カミッロ・カヴールをはじめとする政治家や知識人はトリノでカフェに集い、議論を交わした。彼らが常連だった当時のカフェは華奢な木製建具の外観、アンティークの鏡、木工細工、シヤンデリアが特徴的で一眼でわかる。歴史的飲食店の評価を四〇年以上行っているイタリア歴史的店舗協会によれば、こうした歴史的カフェ cafe storico はトリノに一四件残る。

たとえば都市の西側、中世街区にある「アル・ビチエリン」は一七六三年に創業、イタリアで初めてガス燈を室内に導入したカフェである。作家や思想家が議論を交わした場所として知られるこの店では、名物ドリリンク「ビチエリン」（エスプレッソ、チヨコレート、ミルクの三層構造の飲み物）が誕生し、文化人の社交の場となった。トラムが走る環状道路の角にたつ「カフェ・ブラッティ」は、一八七五年に創業したカフェで、イタリア文学・思想界を率いた出版社エйнаウディ社に近く、カルロ・レーヴィやイタロ・カルヴィーノなどの作家や編集者がたむろした。内部はスタッコで装飾された優雅なリバティ様式で、そのインテリアは一九〇二年の国際近代装飾芸術博覧会にも出展された。

一八五八年創業の「パラッティ&ミラノ」は王家御用達の特許状を掲げる老舗で、パリのパサージュを真似たガラスのガレリアに向いた席は格別であるし、一八二二年創業の「カフェ・サン・カルロ」はカヴール首相が御用達だったのも納得の居心地の良さである。

文化人が集ったのはもちろんカフェだけではなかった。一八七

二年創業の「国際ルクセンブルグ書店」は中心部のカリニャーノ広場に位置し、文化拠点としての歴史をもつ。デ・アミーチスやヴェルガなど当時の著名作家が常連だったこの書店、中庭側の木製建具は歴史的カフェと見紛う外観で、現在も文化サロンとしての役割を担う。

こうしてみると京都にも作家や学者が集う喫茶が根付いている。「進々堂」（一九三〇年創業、「フランソア喫茶室」（一九三四年創業）、「六曜社」（一九五〇年創業）が学生や文化人のサロンとしての役割を担ってきたことは周知のとおりだ。「進々堂本店」と「六曜社」に今も残る相席文化は、議論の場としての当時の姿を引き継いだものであるという。現在の「恵文社」が人気なもの、知の集積がつく場所に惹かれてのことと思われる。

このようにトリノでも京都でも、出版と喫茶はつながり交差すること、都市の知的な魅力を醸成させてきた。本を生み出す場所には、必ずと言っていいほど「喫茶の場」がある。執筆すること、読むこと、喫茶を楽しむこと——それらは単なる個人の営みではない。人々の記憶が折り重なり、知の集積地は作り出されている。

ところで三月刊行の『名所の成立——「名」を与えられた風景』（井戸美里編）では、多様な名所のありかたが描き出されている。名所とはどうつくられてきたのかに思いを馳せつつ、この本片手に老舗喫茶店におとずれてみてはどうだろうか。あなた自身が知の名所をかたちづくる物語の一部となるかもしれない。

「秘伝」と江戸時代の医学

海原うみはら 亮りょう

医の専門的な知識・技術は、江戸時代の医界にあって、師匠と弟子のあいだのきわめて恣意的な紐帯を前提として伝達された、というのが以前からの私の主張である。

周知のように、一八世紀後半以降、全国各地で医学校が設立された。一見して、教育の制度化が成ったとみえる事象だが、実際それがうまく機能しなかったのは、一次史料をみれば瞭然である。当時の学校が果たした役割は、近代以降とはまるで異なるからだ。このほど上梓した拙著『近世藩医の学問と医療環境』でも、そのことは繰り返し主張した。

そして、学問の普及について「秘伝」が多用される点は、当該期独自の姿だった。今の我々にも理解し易い喩えでいえば、それは芸道のありかたとよく似ている。

拙著では、眼科「家里流」の事例をとりあげた。先行研究に拠ると、同流は、伊賀国を発祥とし、大和・畿内地方へと流布、三河国鳳来寺医王如来との関連が深い（奥沢康正・園田真也『眼科医家人名辞書』思文閣出版、二〇〇六年）。

幕末期、家里流は米沢藩の眼科医伊東氏と揉め、師弟関係を断絶すべく一札を作成した（拙著第四章）。伊東が他流で学ぶのであれば、手渡した秘伝書の一式を家里へ返却せよ、と強く求めたのである。要請の根拠は、入門時に取り交わされた誓紙だった。すなわち、師から弟子へ伝授する内容は、流派が代々守ってきた「御秘密」ゆえ、容易に他門の者、たとえ親族であっても嫡子以外へ広めることが禁じられた。

このとき、返却を求めた秘伝書の一つが『眼科龍本論』である。現在、研医学会図書館が同名の写本を所蔵する。漢文・和文・図版で構成され、明時代の眼科術に学び薬性・薬物調合の秘法を収載したものという（中泉行史・中泉行弘・斎藤仁男「伊賀国家里流目書」『臨床眼科』五三―一一、一九九九年）。

同書の秘法は、大和国郡山住の家里三郎兵衛喜定なる者が修めて、代々同家の嫡子へと継承された。巻末に「家里」姓を名乗る者の居所が列挙されているが、それをみると、同流は南都・名張・大坂・堺・京都・江戸で広くおこなわれたらしい。

家里流は、四国にも普及した。土佐藩の首席家老深尾家（佐川領）の家臣として仕えた国友祐仙なる眼科医の家に、一八世紀後半の作成と思われる「龍目論」が伝わる（平尾道雄『土佐医学史考』高知市民図書館、一九七七年）。同書は、流派の医論と「眼病名ヲ付ル次第」、掛薬・洗薬・内薬・指薬の存在を収載している。世上に家里を名乗る者が多いが、直伝の医者に限られ、国友だけが師から秘法を伝授されたのだという（眼科史料 第一八六 家里流「実験眼科雑誌」五―三三、一九二二年）。

一方、安永二年（一七七三）成立の入江正雄^{いばう}「詒謀記事」によると、土佐国安芸に拠る眼科医市原家も、家里流を修めた。市原阜人なる者が眼疾を煩ったさい大坂で家里梅慶の療治を受け効験が著しかったことから同門に入り、蘊奥を得て帰国、眼科を開業し大いに栄えた。その後、彼は土佐藩第二代藩主山内忠義（一五九二―一六六四）の命で藩主家の眼療に携わった（土佐崎人伝統編）。後代の弥惣左衛門も藩主を診ており、彼の記した同家の由緒書が現存するという（前掲平尾書）。

一七世紀末、土佐藩領中村の在番役を勤めた小八木兵左衛門道治は、若いころ市原某に就いて家里流を学んだ。壮年から勤仕の合い間に治療をおこない、市原が土佐を出るとき彼を伊予まで追いつけて挨拶したところ、その執心を賞し、師から秘伝の巻を伝授されたとの由緒も知られる（『三原村史』一九七一年）。

このように家里の眼科療法は、秘伝性を保ちながら全国にかなりの普及をみた。他にも数は限られるが、いくつか同流の伝書が遺されている。

安永六年（一七七七）の写本「家里一流相伝」（千葉大学附属図書館蔵）は、眼療用の薬性・薬製法と、養生法を詳述したものである。巻末には、寛永五年（一六二八）の記と「右之一冊者眼医他流多ト雖モ、此方上ミ恐ラクハ本朝之別伝之子細ニ於テ未タ之有ル可ラザル也、秘ス可シ、秘ス可シ」との一文がみえる。

また、家里流とされる「眼科秘録」（京都大学附属図書館富土川文庫蔵、「眼科秘方伝 他家之流」（研医学会図書館蔵）には、承応四年（一六五五）の年記とともに治療術が載る。

たんじゅんに疑問に感じるのは、秘伝と称しつつ、これら家里流の要綱が紙に写され、容易に読み取れる形で流布した事実である。その秘伝性は、確かに守られたのだろうか。

秘伝、すなわち非開示という形で学問の有効性を担保し、かつ伝授の手段とすることは、もとより現代の感覚と相容れない。だが、換言すれば、知識・技術をより正しく、確実な形で授け得る、巧妙な装置ともみなし得よう。

その前提には、医の知識・技術を希求する、有志たちの深い結束があった。より有益な治療への切望、ただそれだけを根拠とした医師たちの積極的な行動に、私は心惹かれる。

そもそも秘伝は、それに接すれば、すぐに奥義を会得できる存在である。だからこそ、それを獲得するために、相応の資格が求められるのだ。師匠は、自らが所有する知識・技術を継承させるに相応しいか弟子を慎重に査定し、かたや弟子も最大限の努力を惜しまない。そういった作業の積み重ねこそが、江戸時代の医学発展の原動力ではなかったか。

（住友史料館副館長）

私の出版顛末記

石川義宗
いしかわ よしむね

このたび、『シェーカー教徒の思想とデザイン』と題する、私の博士論文を元にした書籍を出版した。シェーカーとは、一八世紀末にイギリスで発祥し、その後アメリカに渡ったキリスト教の一派である。彼らは禁欲的な生活を送り、独自の共同体を築いた。その自給自足の生活の中において、きわめてシンプルなデザインの家具が作られた。デザイン学を専門とする私は、これらの家具を中心としたシェーカーのデザインについて研究してきたが、それを本にまとめるにあたっては、予想だにしないことの連続であった。その顛末について語っておきたい。

ことの発端は五年以上も前にさかのぼる。二〇一九年に大阪で行われた藝術学関連学会連合のシンポジウムで、私は長野県上田市の伝統的工芸品「農民芸術」について発表した。その際、後に本書の担当編集者となるI氏と出会った。氏は他の先生の発表を聴くために来場されていたようだが、私の発表にも興味を持ったとのことで、名刺を渡された。その二か月後、滋賀県立大学で行われた意匠学会大会で再びI氏と会話することになったが、後か

ら聞いた話によると、氏はやはり別の先生（当時の学会長であったF先生）に話しかけようとした時に、F先生のあまりにダンディな佇まいに一瞬気後れして、たまたま横にいた私に雑談を持ち掛けたのだという。

このような二度の遭遇を経て、氏から「論文を送ってくれませんか」と連絡をもらった。シェーカーのデザインの研究は私にとってライフワークになっているが、それまで本にまとめることを具体的に考えたことはなかった。研究の原点である博士論文にしても、大学に提出し審査に合格したものという認識で、過去の成果と考えていた。しかし、このような機会は滅多にあるものではない。私は眠らせていた博士論文のデータを送った。I氏は私の「農民芸術」の発表を聴いてきたため、アメリカの「シェーカー」なるものの論文が届いて大変驚いたというが、すぐに読み込み、内容を面白がって刊行を薦めてくれた。私がシェーカーのデザインの研究を世に問うものとして見直すきっかけは、このようにして偶然に訪れたのである。

こうして出版企画は立ち上がったものの、私の考えてきたことを整理して実際の「書籍」という物質に結実させるための制作過程には、当然ながらいくつもの困難があった。

まず私の博士論文は、家具の設計をCGで探求する内容が半分を占めていた。これを本にするためには、その部分を論述に置き換える必要がある、大幅な加筆修正が予想された。私は「どうせ加筆するなら、より多くの人に読んでもらえるものになりたい」と考え、大幅な改稿もすることにした。すなわち、ほとんど書き下ろしに近いかたちで書籍化に挑むことになったのである。本を手取る日を夢見て、終わりの見えない作業の第一歩を踏み出した。

シェーカーのデザインの質素で機能的な美しさは、現代でも高く評価されている。しかし、本来、彼らの信仰や生活と密接に結びついているはずのシェーカー家具や建築に、現代の評価はどれほどの妥当性を持っているのか、という疑問を私はかねてから抱いていた。この点を考察することが、加筆の重要なポイントとなった。「祈りの場（シェーカーの村）」と切り離すことなく家具や建築のデザインを論じたい」という私の試みを、I氏は理解し、共感してくれた。

執筆に入って間もなく、世界は新型コロナウイルス感染症のパンデミックに突入し、I氏とは実際に会う機会もなくメールで月に一度進捗を報告するやり取りを続けた。執筆は孤独な作業ではあったが、I氏からたびたび届く励ましのメッセージを支えに、少しずつ加筆修正を進めた。この作業を地道に三年ほど続けた頃、I氏から刊行にあたって助成してくれる財団があることを教えて

もらった。「二度の応募で採択されることは稀である」と聞いていたため、あまり期待せずに応募してみたところ、大変ありがたいことに採択された。これは、大きな励みになったが、同時に刊行にリミットが設定されることになった。私はマイペースな人間であり、「急ぐことはできない」という妙な信念を持っているが、このときはやはりそうも言っていられず、緊急事態になった。

そこからは時間との戦いである。本の執筆は論文の執筆とは異なる部分が多く、戸惑いながらの作業であった。書いては直し、直しては書く、をひたすら繰り返し、なんとか締切ギリギリのタイミングで刊行にこぎつけることが出来た。この過程においては、たいへん多くの方々にお世話になり、また、お手数もおかけしたが、「刊行を楽しみにしている」というお声も何度もいただいた。

完成した書籍を手にとったときは、実に感慨無量であった。装丁はシェーカーの村で生まれたかのように清楚なデザインになっており、紙の手触りや本の重さを感じ、茶色の見返しや扉、爽やかな水色の花布にまで目が行った。I氏をはじめ、研究者仲間、シェーカーの村の関係者、そして、印刷会社や装丁家さんなど多くの方のご協力の結晶が、本書である。

本の刊行は私にとって研究者としての新たなスタートでもあるが、この本の価値は、手に取ってくださる読者の皆様によって作られるはずである。デザイン、宗教、文化に関心を持つ人々に、シェーカーの豊かな祈りの生活を知っていただくこと、また、本書が議論のきっかけになることを心から望んでいる。

メンデルはなぜ蘇ったのか

中尾 暁
なか お ぎよう

一九世紀オーストリアの修道士グレゴール・メンデルは、一般的に「メンデルの法則」を発見した「遺伝学の祖」として知られる人物である。多くの遺伝学者は、メンデルを自分たちの英雄とみなしてきた。メンデルが行ったエンドウの交配実験は中学校の理科の教科書で紹介されており、遺伝学への入口として機能し続けているばかりか、優れた科学実験のお手本でもあると評価されている。分子レベルで生命現象の理解が進んだ現代でも、血液型の遺伝から遺伝性疾患にいたるまで、メンデルの業績の重要性を実感する機会は多いだろう。

だがメンデルは、私の専門とする科学史においては大きな謎の一つである。その理由は、メンデルの業績が評価されるに至った経緯にある。メンデルは一八六六年に、エンドウ実験の結果と考察をまとめた論文「植物雑種についての実験」を発表した。しかし当時、この論文は特別に大きな反響を呼んでおらず、現在に近い評価を受けるようになったのは一九〇〇年以降のことであった。もちろん、ある学者が唱えた新説がすぐには認められず、だいぶ時が経ってから評価されたという事例は科学史上に少なくない。二

〇世紀初頭にヴェーゲナーが提唱した大陸移動説はその一例である。だが、メンデルの場合は少し事情が異なる。メンデルが解明したはずの遺伝法則は、当時否定されたわけではなく、そもそも議論すらされていないように見えるからである。

そこで長らく問題とされてきたのが、「なぜメンデルは無視されたのか」という問いであった。遺伝学の礎となるはずの実験成果が正当な評価を受けられず、三〇年以上にわたって科学者たちの時間を空費させてしまったのはなぜなのかと、さまざまな観点からの説明が試みられた。特に非専門家向けには、メンデルは片田舎の修道士だったので科学者たちの世界から孤立しており、論文自体がほとんど読まれていなかったのだというような説明が普及してきた（実際にはそうではなかった）。

しかし、ここ数十年のメンデル研究の進展によって状況は一変した。一言でいえば、そもそもメンデルが研究していたのは「遺伝」ではなかったということが明らかにになってきたのである。つまり、メンデルは自分が遺伝の研究をしているとは思っていないかつたし、彼の同時代人たちもメンデルの論文を遺伝の研究だとは

考えていなかったらしい。

では、メンデルは自分が何の研究をしていると思っていたのか。実は、メンデルは一八世紀以来の雑種研究の伝統——分類学の確立者リンネに由来する伝統である——のもとで研究を行っていた。この伝統では、雑種から新しい「種」(分類学上の基本単位)が生じることはありえるのかという問題が中心的な関心であり、同時に有用動植物の品種改良に役立つ知識も探求されていた。メンデルの論文は「無視」されていたのではなく、当人の意図通りにそのような関心のもとで読まれていたのである。

我々にとって馴染みのある、メンデル論文は遺伝学の基本法則を解明した論文だという解釈は、一九〇〇年以降に生み出されたものであった。一般に「メンデル主義者」と呼ばれている初期の遺伝学者たち——その代表格は「遺伝学」を名付けたウィリアム・ベイトソンという人物である——が、三〇年以上も前に書かれていたメンデル論文に、メンデル自身は意図していなかった新しい可能性を見出したわけである。

こうして、メンデルをめぐる科学史研究は新しい段階に突入したといえる。もはや「なぜメンデルは無視されたのか」という問いは成り立たない。その代わりにいま問われているのは、「メンデルの雑種研究はなぜ、どんな文脈によって遺伝の研究として再解釈されるようになったのか」という問いと、「そのような解釈はなぜ一九〇〇年より前には生まれなかったのか」という問いである。これらの問いに答え、遺伝学史を新しい見立てのもとに再構成して提示することが、私の当面の目標となっている。

私の見立てはこうである。そもそも古代以来、遺伝理論は発生理論に従属していた。言い換えれば、生物の体はどのようにして形成されるのかという発生の問題のほうが重視され、それを説明する理論のなかで、体の各部分が親や祖先と似るのはなぜかという遺伝の問題も併せて説明されていたのである。メンデルの論文発表当時も、遺伝の問題を扱っていた学者たちは遺伝だけでなく発生も説明できる理論的枠組みを追求していた。具体的に言えば、彼らは生物の体のなかに無数の小生命のようなもの(ジェミュールとか胚種などと呼ばれた)が存在し、それらが成長・増殖・休眠といった生命的な振る舞いをすると思定することで、発生と遺伝の現象を説明しようとしていた。このような遺伝観のもとでは、エンドウの雑種の子孫が数学的な規則に従うというメンデルの論文を遺伝研究として解釈することは困難であった。

だが一九世紀の終わり頃、ベイトソンらが遺伝の問題を「化学者のように」理解しようという新しい姿勢を打ち出す。ベイトソンは生物学、特に進化研究が物理学のように実験や数量的把握に基づく精密科学になっていないという危機感をもっており、化学をお手本として生物学を立て直そうとした。ここから、生物の種や変種は化学物質の種類に相当し、生物にも化学の原子に相当する何かがあるといった、生物学と化学のアナロジーの思想が発展しはじめる。この一見突飛な思想は、発生学的関心から切り離された新しい遺伝観を生じさせ、メンデルの論文を再解釈する文脈を提供した。こうしてメンデルは「遺伝学の祖」として蘇ったのである。

(広島大学大学院人間社会科学研究所研究員)

共同研究のつくりかた

高木博志

（京都大学名誉教授（人文科学研究所））

並木誠士

（京都工芸繊維大学特定教授、同大美術工芸資料館元館長）

たくさんの研究者が集う共同研究会を運営し、その成果を優れた共同論集としてまとめ上げるには、多くの手間と困難が伴います。参加者各自の発表の「寄せ集め」ではなく、1＋1＝2以上の成果を生み出すためには何が必要なのか。これまで数多くの研究会を主催してきたお二人に、共同研究運営のコツをおうかがいしました。

■これまで手掛けてきた共同研究会について

高木…私は京都大学人文科学研究所（以下、人文研）所属で、共同研究が仕事みたいなところですから、自分は運営のための事務局に徹することを一番に考えながら、二〇〇三年以降、「近代京都研究」「近代古都研究」「近代天皇制と社会」「近代京都と文化」と四つのテーマで研究班を続け、いずれも共同論集としてまとめてきました。いまは「近代日本の宗教と文化」というテーマで研究班をしていて、これもいずれ論集にまとめるつもりです。

そもその始まりは、京大人文研に来た一九九八年からなのですが、最初に丸山宏さんと伊従勉さんと一緒に近代京都の研究会を

始めまして、その影響が非常に大きかったです。京都については、やはり古代・中世の研究が多く、近代についての研究は当時あまりなかったので、学際的な共同研究をしようということで始まったんですね。最初は自主ゼミみたいな感じで研究会を始めて、それが人文研の公的な研究会になりました。そのあとは、テーマを歴史都市、天皇制の研究、それから狭い意味ではない文化史、つまりは政治や社会や教育と関わるような、美術でいえば岡倉天心が時代の精神とか政治社会の総体として美術を語ったような、常に政治や社会と接点がある文化史にとりくみました。それらを大きなテーマにしてみました。

並木…僕の場合は、もともと室町や桃山の絵画を専門にしていたのですが、共同調査に行くことが大変多かったんです。たとえば海外のコレクターのもとに調査に行くときなど、調査する作品の数が多いとどうしても手が足りないのです、大学院生や若手の研究者と一緒に行って、多い時には七、八人で手分けして調べる。そういうチームプレイみたいなことはずっと前からしていました。その延長線上でもあるんですけども、二〇〇八年から京都工芸繊維

大学（以下、工織大）の美術工芸資料館の館長をすることになって、その頃から館蔵資料の調査や展覧会にくわえて、工織大とその前身校の京都高等工芸学校が近代京都の美術工芸に対してどんな役割を果たしたのか、というのを検証しはじめました。それで二〇一五年から科研の共同研究を続けて、研究・調査をするにあたっでのチーム作りをしているという感じですね。

古美術研究の調査チーム経験と、おもに美術工芸資料館での展覧会ベースでの共同研究が、おそらく僕にとって二つの柱になっているので、高木さんのように人文研という共同研究のメッカみたいなところで、研究会ベースで最初から始められるのとはちょっと違って、むしろ、ものベースで始まっているのです。

■メンバーの集め方

並木…美術工芸資料館の館長になったからには、近代をちゃんとやらなきゃいけないということを、まあひしひしと思うわけですよ。ところが僕自身はその近代についての素養が全くないわけ。だから、たとえば近代の漆工芸をやっている若手がいたら、一緒にメンバーに入ってもらおう。分からないところを補填してもらおうようなスタッフを引っ張ってきて、「一緒にやろうよ」というわけです。で、染色は誰、陶芸は誰、と声をかけていくうちに、メンバーが決まっていきました。立场上、「僕が研究費は取ってくるから、一緒にやろう」ということですね。それで全体をひとつのまとまりに仕上げていくような私たちの共同研究をやってきたし、僕はそれしかやってこなかった。

高木…最初に、全体テーマに即して信頼したメンバーに声をかけるのが共同論集を作るにあたっては、すごく大事なところだと思っています。歴史でも美術でも建築でも、映画でも、それぞれの分野で、史資料に即して実証的に議論するしっかりした仕事をされていて、かつ、私がいちのおおがましいのですが、構想力がある人であってほしい。歴史家はどちらかというと雑食というか、医者というなら専門医よりは開業医的な側面が強いんですけれども、美術や文学や建築のような、それぞれの学会と専門がしっかりとある分野であっても、そのコミュニティを一步超えて発信してくれる普遍性がある方をお誘いするようにしています。あと僕の場合は、昔の人文研の助手人事は手書きの卒論や修論を読んで評価されていたこともあって、書かれた文章をちゃんと読むことは、とりわけ大事にしたいと思っています。

並木…高木さんは、とにかくすぐ本を読んでいますよね。僕なんかは情報取集といえば展覧会が多いから、そこは歴史家のすごいところだなと思います。

高木…それから、現場の教育力も評価したいですね。大学のなかだけでなく資料館とか美術館、博物館とか、現場で史料・モノを見ている人のなかには、研究が抜きこんでいる人がいるんですね。だから、そういう方にもくわわっていただきたいと思っています。

並木…そういう人って、なかなかネットワークに入りにくいんですよ。だから、高木さんみたいな集め方をされると、結構みんな活躍するんじゃないかと思うんですね。そういう人たちに出来るだ



並木氏

け来てもらって、一緒にやるというところは、僕の研究会も割と共通している部分があります。

高木…そうですね。やっぱり共同研究は、そこでネットワークができてつながりができていくってというのが大きな醍醐味だと思います。

並木…以前『京都 近代美術工芸のネットワーク』という京都の美術工芸に関わった人たちの人脈に注目した本を出しましたが、研究の対象もネットワークで考えて、研究者自身もネットワークで情報収集して発信していく、というところが、それをすべての研究で言えるかは難しいけれども、ひとつの基本ではありますよね。

高木…自分自身を思い返してみても、共同研究に参加して、そこで行っている人と出会ったのは大きな財産ですね。

——**編者の立場としては、いろんな人を知っていて声をかけられないといけない、と。**

並木…研究会としてもそうだけど、その分野が発展していくためにも、それが必要なことなんだな、と思います。うまくいけば、若い人にとってはキャリアにも人脈にもなるし。

高木…コロナ禍のなかでは難しかったですが、懇親会も議論の場で、よく丸山宏さんは、人文研は「二次会から勉強や」って仰っていました（笑）。

■共同研究の議論を盛り上げるために

並木…僕の場合は、立場上一番年上であるかもしれないけども、近代のことに関しては経験値があまりないので、質問を素直にしやすいんです。そうするとじつはみんな分からなくて、質問が続いていつぱい出たりする。それは議論を回すために心がけるといふよりも、自然にそうなっているところはあるなと思いますね。

高木…私の場合には、基本は参加者が自由に議論している感じがですが、研究代表者として、報告される方の仕事は読んで、どういうことを次やろうとしているか？ ということと、のちに出す成果論集がどんな構成になっていくかを考えます。が、後者を考えるのは研究会の終盤になってからです。むしろ最初の人選びを重視して、全体テーマに即して面白い報告をしてくる人に来ていただき、あとは参加者に委ねています。

並木…ほかには、調査で埋もれている作家や新しい作品を見つけたら、なるべく発表してね、というのは意識的に言っています。みんなそれを面白がって、話を広げていくことはひとつのテーマにしているの、そこから始まる研究は多いですね。できるだけ共有できるものは共有して面白がろう、みたいな。

高木…今やっている「宗教と文化」の研究会では、そもそもあまり先行研究がないもので、史資料や関連研究を教え合うことはしよっちゅうあります。

並木…とにかく面白いネタを出して、みんなで面白がるというのが研究会の原点。

高木…会そのものは、参加者にとっては全然仕事でもなんでもない、手弁当ですから、この忙しい世の中で、土日をつぶしてまで行こうって思ってもらえるような楽しい研究会にしたいですね。

■共同研究から共同論集へ移るにあたって

高木…やっぱり、学術的にも商業的にもちゃんとした本を出版したいという思いが強くなるので、全体テーマに即した本になるようには意識しています。「宗教と文化」がテーマなら、宗教だけとか、文化だけにならないようにする。さらには学際的でありながらも、本としてまとまりのあるものになりたい。そのためにどういう論点を作ろうかなとは、研究会が進むなかで、いろいろと考えます。

並木…僕のほうは展覧会やもののベースの研究会なので、初期メンバーにくわえて、調査で知り合った人とかも含め、テーマを伝えてお声がけをします。本としてのタイトルと執筆者が決まったら、次は、どういうふうに分けをするとか、どんな順番に並べる

かとかっていう問題が出てくると思うんですけども、その時にはできる限り、書き手の意を汲みながら、くっつけていく感じはありますね。それが本を作る時の、代表者としての大きな仕事のひとつです。

高木…研究会を続けて三年、四年と経過していくなかで、論点というか、

本の売りをする部分を考えていくわけです。たとえば大正期のロマン主義を学際的に考える、とか。最初に総論として、本全体でどういう意味があるのかを書くわけですけれども、報告を積み重ねるプロセスで出てきた議論の核をそこで考える。そしてそれが、本では「部」になって目次が出来ていきます。

——最初に想定していたものとは違うとか、想像もしていなかったものが生まれてくることもある？

高木…ありますね。『近代京都と文化』の場合で言えば、僕は当時竹久夢二を調べていたんですけど、細川光洋さんという文学研究者の方が吉井勇（※大正・昭和初期に活躍した京都ゆかりの歌人）のことをやっていた。吉井勇をとおして、長崎由来の南蛮ブームと、夢二の描いたような祇園の舞妓さんとかつながるという思いもよらない経験をしました。で、さらにいろいろなマキノ映画とか美術（国画創作協会）の問題とかにもつながりが生まれたのですが、それは研究会が始まって、二、三年ぐらい経ってからのことです。

並木…研究会って、いくら白熱しても、いくら記録を取っても、その場限りの刹那的なものなんですよ、展覧会と一緒に。力を入れてやっても、撤収したら全然跡形も残らない。ここまでの研究会や展覧会の積み重ねをどう本にするかっていうのは、消えてしまったものをどういうふうにまとめ上げて、ひとつの成果として見せるかっていうところだと思います。一回一回の研究会や調査は、個別的で刹那的かもしれないけども、本は幸いにして作れば残りますから。

（二〇二五年三月六日 於思文閣本社）



高木氏

▼おかげさまで本通信が一二〇号を迎えました。記念企画として、高木博志先生、並木誠士先生による特別対談を収録しました。魅力的な共同研究の成果を発信してきたお二人の議論は、どれも興味深いものでしたが、何よりも自身が楽しく学ぶことを大切にされていることが印象的でした。また、議論を重ねる中で浮上してきた新たな論点や発見を書籍に反映させていくくだりなどは、まさに共同論集の真骨頂。そうした熱量を取り込んだ書籍を出していきたいと思います。ちなみに、お二人の「共同研究屋」としてのお仕事はまだ続くそうですので、次の成果も乞うご期待。

▼気鋭の若手研究者の研究成果を発信する30sの三冊目を刊行しました。読み過ごしてしまいそうになる身分・秩序にまつわる言葉にこだわって、古代から中世への社会の変化を捉えた力作です。

▼大阪・関西万博が始まります。賛否両論、というよりも、開催に懐疑的な意見が多いなかでのスタートです。ただ、今は「成功体験」となっている七〇年万博も、開催前は逆風が吹き荒れていたそうです。歴史の審判はのちの時代が下すもの。この万博の語りがこれからどうなっていくのか、長い目で追いかけていきたいと思います。

▼私の職業を知らないはずの娘が卒園式で語った将来の夢が、なんと「本屋さん」！ちょっと前まで古本屋で走り回る迷惑客でしたが、温かく見守っていただいたおかげで立派な書痴に成長しました。(R)

▼タツノオトシゴが好きです。怪獣の幼体を思わせるフアンタジックなシルエットと、非力なのに肉食性というギャップに惹かれます。自宅でも飼えることを最近知り、飼育に手を出そうかと苦悶する日々です。(N)

▼子供のころ百人一首かるたに熱中してから、京都の四季の情景には今もひそかな憧れがあります。雪が積もったまちなみ見てみたかったのですが、積もった日にちょうど京都にいませんでした。次こそは：。(E)

▼24年度いっぱいで新刊部を離れることになりました。引き続きグループ会社で働きます。お蔭様で出版では多くのご縁、楽しい仕事をさせていただきましたこと、この場を借りて厚く感謝申し上げます。(大)

▼表紙図版：「幻の源氏物語絵巻」帯木巻部分（ニューヨーク・パブリック・ライブラリー・スプレンサー・コレクション所蔵）

『鴨東通信』は年2回（春・秋）刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信 No.120

2025（令和7）年4月21日発行

発行 株式会社 思文閣出版

TEL 605-0089

京都市東山区元町355

TEL 075-533-6860

FAX 075-531-0009

E-mail pub@shibunkaku.co.jp

<https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/>

表紙デザイン

HON DESIGN

東寺文書研究会編

東寺執行日記 全三巻

第三巻 3月刊行 A5判上製・各約三〇頁／定価 各一五、四〇〇円

執行は長官僧である東寺長者系列の寺内の要職。堂舎・仏像・各種儀式の法具などの管理・保全の責任者であり、寺内の庶務を担当した。本日記はその公務記録で、鎌倉時代末期から近代にいたる長大な記録が残る。本シリーズではその中世部分を翻刻する。業務記録として東寺の年中行事等の歴史を伝えるだけではなく、当該期の政治・社会の中心である京都政界・社会に関する、長期にわたる定点観測の貴重なデータを提供する。

藤井讓治編

織豊期主要人物

居所集成 (増補第3版)

10月刊行 B5判上製・六三〇頁／定価 八、八〇〇円

京都大学文学部日本史研究室編
藤井讓治編・解説

【京都大学史料叢書20】

晴豊公記

11月刊行 A5判上製函入・四一〇頁／定価 一六、五〇〇円

【第三巻 目次】

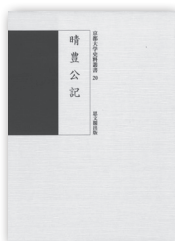
天文十一年～十四年、十九年～二十四年
弘治二年～四年
永禄二年～十三年
元龜二年～四年
自天正二年至文禄二年
慶長八年～十二年
自慶長十三年至同十六年
付録1 東寺灌頂院御影執事注進并差文請文案
付録2 供僧聖清記、自応永十三年至同二十一年

【解説編】

解題 (遠藤基部・大田壮一郎・高橋敏子)
コラム1 東寺執行日記と関連する史料二点 (遠藤基部・高橋敏子)
東寺執行職の相伝と相論 (黒川直則・遠藤基部・高橋敏子補訂)
附表 執行関係史料目録
執行の周辺・中世東寺の組織と人 (遠藤基部・大田壮一郎・木下竜馬・高橋敏子)
コラム2 僧の名と身分差 (木下竜馬)
コラム3 ある東寺公人の一生——大炊・定金性存 (木下竜馬)
執行関係年中行事一覽
東寺境内図 (遠藤基部・費井裕恵・比企貴之)
東寺寺辺の散在所領 (馬田綾子・比企貴之)
馬田綾子・遠藤基部・比企貴之

2016年の第2版刊行から、約8年。織豊期の重要人物たちは何時何処で何をしていたのか、数多の研究者が調べ上げ集めた基礎資料を、ついに第3版として大幅アップデート。
居所の確定は、従来個々の研究者が、特定の人物、特定の時期に限って行ってきたため不完全で、公にされることもきわめて少なかった。本書は、主要人物の現在知りうる限りの居所の情報を編年でまとめた研究者必携の書！ 第3版では従来の25名に加え、新たに松平家忠、徳川秀忠、宇喜多秀家、前田玄以、増田長盛、長束正家、島津義久、島津義弘、立花宗茂の9名を加え、豊臣政権の五奉行・五大老を完備した。

近世初頭にかけて代々武家伝奏を務めた勸修寺家15代当主、勸修寺晴豊(天文13年生、慶長7年没)の自筆日記。天正6年にはじまり、文禄3年まで16年にわたるが、その間多くの欠失があり、1年を通して残されているのは天正18年分のみである。本日記は、1963年に京都大学文学部国史研究室の所蔵となった勸修寺家文書(現在は京都大学総合博物館蔵)および内閣文庫所蔵の原本を使用した。このほかに晴豊が関わった、口宣案や編目、書状案を中心とした永禄2年・慶長7年の記録を収録。



表示価格は税込

荒木浩（国際日本文化研究センター名誉教授）**編**

《無常》の変相と

未来観

| その視界と国際比較

3月刊行

A5判上製・八六四頁／
定価 一六、五〇〇円

『方丈記』において、「無常」という語はただ一度だけ用いられ、天変地異を前にあきれるほど脆い日本の家屋と儚い人の命の類比的な一体性を説く。いつしか私たちが常識のように捉えるこの仏教的な無常観は、先達としての東アジアや東南アジア、さらには起源としての南アジアと比べると、どれほど共通項を有し、あるいは異にするか。はたまたヨーロッパの堅牢な遺跡の中で、それはいかなる幻想をもたらすか。日本の無常さらには文化観の現代的な問い直しのために、多様な専門の研究者が議論を重ね、「無常」概念にとどまらず、広く日本古典文化の転変と推移、また〈グローバル〉な〈アジア〉の中での日本古典文化の解明を目指す。

【目次】

序論 〈無常〉の変相と未来観・叙説

I
《無常》とは何か

—その始原から現代世界へ

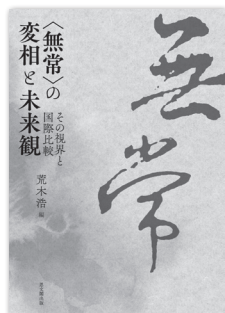
anilya/anicca、無常、常なし
打ち壊される仏たち
(石井公成
佐藤弘夫)

Ⅱ 古代の文学と〈無常〉

「うつろふ」事物の「無常」性
(土田耕督)

Ⅲ 中世の〈無常〉を問い直す

「跡」の視界
(木下華子)



IV
《無常》の表象と変相

—古代／中世から近世へ

無常の表象
(田村正彦)

V 近代と〈無常〉——夏目漱石の中へ

（永井久美子）

VI 国際的〈無常〉論とその視界

エンタングルメントとしての無常

(エドアルド・ジェルリーニ)

神とかけて、天と解く。その心は？

（アリレサー！・レサーイ）

後鳥羽上皇の水無瀬殿（水無瀬離宮）の構造と承
久の兵乱後の動き（豊田裕章）

金 玄耿（明知大学校人文大学助教授）著

中世的身分秩序と家格の形成〔30s〕

4月刊行

A5判上製・三〇〇頁／定価 九、三五〇円

古代から中世への移行期とされる平安時代、平安貴族社会の身分秩序はどのように形成され、変化したのか。中世的な家格はいかにして出現するのか。

古代律令制の社会において、官人の身分を規定するのは天皇と官吏個人との関係であった。しかし平安時代には、個人ではなく血統や家系が身分を規定する単位として重要視されるようになる。父祖から続いた官位の継承は家の格付けにつながり、その子孫は家格に従って到達し得る地位を決められる。こうして血筋・種姓により定められる中世的な身分秩序が確立していく。

本書では、「貴種」「公達」「良家」という3つのキーワードを中心に、史書や古記録のみならず、詩序や南都寺院の文献など多様な史料を活用し、それらに表れた貴族の出自や身分に関わる言葉を追っていく。その地道な作業から、言葉の意味やその対象が時代とともに変遷する「瞬間」を捉え、ひいては古代から中世への身分概念の変化と、家格の形成過程までもを明らかにすることを試みる。

有富純也・佐藤雄基編【好評増刷】

摂関・院政期研究を読みなおす

古代・中世を専門とする中堅・若手の研究者が、摂関・院政期研究の最新線と展望を示す。

定価五、〇六〇円【電子版有】

西山剛著

輿をかつぐ人びと―駕輿丁・力者・輿舁の社会史

「輿舁」の実態に光をあて、諸側面を比較することで、輿を舁くという行為そのものの社会的な意義を問う。

定価 九、九〇〇円

〔目次〕

序 章

古代から中世への転換と家格の問題

第一部 「貴種」と種姓観念

第一章 古代の「種」観念とその変遷

第二章 平安貴族社会と「貴種」

補論一 「様子孫」から「貴種」へ

第三章 藤原頼長の「凡種」観

第二部 「公達」と「良家」

第二章 家格としての公達の成立

補論二 実務官僚系院臣の登用は身分秩序の打破か

第五章 平安時代の南都寺院社会と「良家」―興福寺維摩会研学

第六章 堅義を中心に

平安後期における武士の階層

移動―越後城氏の事例を中心に

終 章

桃崎有一郎著

定価 九、三五〇円

鎌倉幕府礼制史―儀礼論と組織論

鎌倉幕府の共食儀礼「境飯」を徹底的に分析し、法を補完する礼の役割を解明しつつ、全く新しい鎌倉幕府像を導き出す。

倉本一宏著

摂関期古記録の研究

長く古記録に関わる研究を牽引してきた著者による、摂関期の古記録に関する論考と新稿をまとめた論文集。

定価 八、八〇〇円

上川通夫（愛知県立大学教授）著

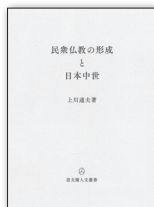
民衆仏教の形成と

日本中世

【思文閣人文叢書】

3月刊行

A5判上製・五〇四頁／定価 二一、〇〇〇円



国家宗教として日本に導入された仏教は、中世にいたって広く社会に定着したとされる。ただし中世仏教は、権門体制論や顕密体制論において、権力側が民衆を編成し、抑圧する装置としての側面が強調されている。はたして中世の民衆は仏教を押し付けられただけの存在なのか？

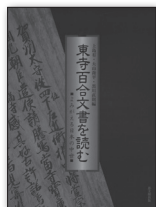
本書は、民衆自身の生存と権力支配への抵抗を求める普遍的な思想が、仏教の用語や思想（慈悲、不殺生、和合など）と接することで表現された可能性を追求する。断片的ながら願文、起請文、村の禁制、地域の小規模寺院の存在などに史料の痕跡を見出し、民衆思想として萌芽した状況を浮かび上がらせる。

上島有・大山喬平・黒川直則編

東寺百合文書を読む

—よみがえる日本の中世—

B5判変形並製・二六四頁／定価 二七五〇円



※東寺百合文書の中から50点を選び、魅力の一端を紹介する

※各文書に釈文と第一線の研究者による解説を付す

※各文書を大型写真で紹介

※中世文書を読み解くための格好の入門書

※索引・文書編年目録・参考図版を付す

京都府立京都学・歴史館編

東寺百合文書 第十六巻 ル函二

東寺百合文書とは、東寺に襲蔵されてきた、奈良時代から江戸時代初期まで約900年にわたる、総数1万8000点・2万7000点におよぶ日本最大の古文書群である。2015年ユネスコ世界記憶遺産に登録。本史料集には「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻。2年ぶり待望の第十六巻。

定価 一五、四〇〇円

中世史研究会編

日本中世の東西と都鄙

—中世史研究会五〇周年大会論集—

本書は、中世史研究会の創立50周年を記念して行われた2年間のシンポジウムの成果である。第I部には、東国とされる地域と西国とされる地域のそれぞれの社会構造はどのように描けるかを論じる諸論考、第II部には都鄙の関係性や相互認識のあり方を論じる諸論考を取り、併せてシンポジウム当日のコメント、討論記録も収録。政治権力論だけでなく、流通経済や文化意識にも目を向け、中世の列島社会の特質に迫る。

定価 二一、〇〇〇円

表示価格は税込

海原亮（住友史料館副館長）著

近世藩医の 学問と医療環境



3月刊行

A5判上製・三七二頁／定価七、一五〇円

近世は、ごく普通の人びとのあいだでも「病にかかったら医師に診てもらおう」という考えが浸透していった時代である。しかしこの時代、公儀＝幕府・藩は医療知識の獲得、社会への普及・提供に積極的な役割を果たすことはなく、社会全体を視野に入れた医療システムは、ついに構築されなかった。そうしたなかで、医学の発展を主導したのは、藩医身分の者たちだった。

そこで本書は藩医たちに焦点を定め、その身分＝生業の特質、知識や技術の獲得・継承と社会への普及のありようを明らかにし、さらにその実態が近代の医療制度をいかに規定し、継承されたかを論じる。

洋学史学会監修／青木歳幸、海原亮、杏澤宣賢、佐藤賢一、イザベル・田中・ファンダーレン、松方冬子編

洋学史研究事典

グローバルな社会における洋学史研究の成果を盛り込んだ最新の研究事典。
定価 一四、三〇〇円

小石家文書研究会編

究理堂所蔵 京都小石家来簡集

小石家究理堂が現在所蔵する貴重な史料のうち、医者・蘭学者による書簡を選んで影印・翻刻を収録。
定価 一五、八四〇円

〔目次〕

序 章

第Ⅰ部 藩医の身分と職分

第一章 知識・技術の所有と身分

第二章 藩医の職分とは何か―伊勢崎藩医の事例から

第三章 江戸の眼病療治―福岡藩医田原養卜「眼目療治帳」を素材として

第Ⅱ部 近世の医学教育と医療環境

第四章 地方藩医の身分存立と学統―米沢藩伊東家の事例から

第五章 江戸時代の医学教育―米沢藩の事例から

第六章 鳥取藩在村の医療環境

―嘉永・安政期「在方諸事控」を素材として

第Ⅲ部 近世近代移行期の医療環境

第七章 医療環境の近代化過程―維新期の越前国府中を事例として

第八章 明治初期新川県の医療環境

第九章 近代医制の成立と漢方医―服部甫庵の業績をめぐって

終 章

西野嘉章著

洋学誌―解剖・言語・博物

博物館工学者の視点から、学術標本（モノ）を出発点とする研究方法の可能性を、あらたに提起する。
定価 八、八〇〇円

住友史料館編

住友史料叢書 37

主管者協議会議事録 一

1620年代から大坂で銅の精錬を業とし、一時世界銅産市場においても重要な位置を占めた住友家に残る史料類を翻刻。本巻より近代史料のなかからも重要な史料を選び刊行する。
定価 二二、一〇〇円

表示価格は税込

牧知宏著

近世京都における

都市秩序の系譜



2月刊行

A5判上製・五六八頁／定価 一〇、四五〇円

現在の京都市中心部のいわゆる「田の字地区」が上京区・中京区・下京区の三つの行政区に分かれるのは昭和四年からで、その歴史は100年にも満たない。かつては上京・下京の二つに分かれていた地域概念は、中世末から近代へとつながるが、近世においても様々な展開を経ることになった。

本書では、「町」・「町組」・「惣町」という重層的な内部構造を持っていた近世京都における「惣町」（『上京・下京』に着目し、京都住民と奉行所との間の行政上の関係だけでなく、近世を通じて行われ続けた徳川將軍家との間の儀礼関係も含めて分析すること、近世京都の都市秩序の系譜を明らかにする試みである。

登谷伸宏著

近世の公家社会と京都

―集住のかたちと都市社会―

公家町の形成・変容過程の解明を通じて、公家町を中心とした京都の都市空間の特質を明らかにする。

定価 八、八〇〇円

岸泰子著

近世の禁裏と都市空間

文献史学や民俗学も視野に入れて近世京都の都市空間の特徴を多角的な視点から包括的に論じた一書。

定価 七、〇四〇円

【目次】

序章

第一章 京都における《惣町》（上京・下京）の位置

―「御朱印」に注目して―

第二章 近世前期における都市秩序

―徳川將軍家に対する拝謁・献上儀礼の参加者選定にみる

第三章 近世前・中期、都市行政の展開

―年寄と町代の関係をめぐって―

第四章 近世京都の都市歴史叙述―「京都旧記録」類の成立と伝播

第五章 近世京都における徳川由緒の語られ方

第六章 近世中後期における都市秩序の転換

―「惣町運動」と徳川將軍家に対する拝謁・献上儀礼

第七章 近世後期、都市行政の変容―地域住民組織の動向を中心に

第八章 近世京都の都市秩序における《惣町》の意義―飢饉への対応から

みる

終章

「年頭御礼関係一覧表」／索引

尾脇秀和著

近世京都近郊の

村と百姓

山城国乙訓郡石見上里村と、同村百姓にして公家家来でもあった大島家を研究対象にとりあげ、近世百姓の変容と実態を多面的に明らかにする。

定価 五、二八〇円

桃崎有一郎著

中世京都の空間 構造と礼節体系

中世の京都で実践された礼節体系の考察を通じて、中世京都の空間構造を明らかにし、室町殿権力の形成・展開過程をも論ずる。

定価 七、九二〇円

表示価格は税込

末岡照啓著

徳川幕臣団と江戸の金融史

―札差・両替商の研究―

12月刊行

A5判上製・四〇〇頁／定価 八、八〇〇円

徳川幕臣団（旗本、御家人）の俸禄米を担保とした貸付けによって家計を支えた札差、旗本知行所の年貢米を受けとり家計の面倒をみた両替商など、江戸の有力商人の経営実態について、幕府の金融政策を通して分析。従来の高利貸しと困窮する武士といった画一的なイメージを超えて、幕藩体制を維持するために幕府、幕臣団、有力商人たちがそれぞれの思惑を抱きつつも、相互に依存する関係性を浮かび上がらせる。また研究史上、上方に比べて軽視されてきた江戸の金融史の再評価も企図する意欲作。

本多三郎著

ブリテン資本主義下の アイルランド農業

2月刊行

A5判上製・八四四頁／
定価 一六、五〇〇円

―土地戦争の経済史的背景―

草を食む家畜がアイルランドの大地を占領し、人々は消えていった。

大飢饉により住民の海外脱出と移民に一気に弾みがつき、1891年に行われた国勢調査では羊の数が人間を上回り、1901年には牛の数が人間を上回った。

自然と人間の力が和合して発展していく農業の取り組みもそこにあったが、アイルランド農業がロンドンを初めとするブリテン市場の動向に左右される傾向はますます強まり、大規模な土地支配の利害が絡み合った投機資本の参入さえ広がっていった。

本書は、「世界の工場」ブリテンの横腹に抱え込まれていくアイルランドの19世紀経済史最後の言葉「家畜増え、民失う小さな国」を同時代の資料で実証するものである。



目次

序章 本書の目的

第1部 徳川幕臣団と札差

第1章 近世蔵米知行制の成立と御張紙値段

第2章 札差仲間の成立・変遷と寛政の葉捐令

第3章 札差証文について

第4章 天保の無利息年賦返済令と札差

第5章 幕末期の札差経営

―泉屋甚左衛門店の経営分析―

第6章 明治維新後の幕臣団と札差

第7章 幕藩領主と江戸両替商

第8章 江戸両替仲間の結成と金融政策

第9章 江戸両替商の代官・田安家・一橋家掛屋業務

第10章 江戸両替商の大名・旗本金融業務と商用貸付

第11章 明治維新後の江戸両替商

終章―江戸札差と両替商の位置づけ

目次

序章 アイルランド大飢饉

―1840年代後半～50年代前半―

第1部 大飢饉後の農業構造転換

第2章 牛を中心とした家畜の全国的流通

第3章 生きた家畜をはじめとする大規模な畜産物輸出

第4章 1970年代における農民層分解の全国的分析

第2部 アイルランド農業の担い手を地域から見る

第5章 酪農の中心地で肉牛生産の出発地である南西部マンスター

第6章 北部アルスター経済

第7章 西部のメイヨー・コナハトへ行く

第8章 北部レンスター・ミーズの大牧畜業・人影

第3部 農業

第9章 19世紀後半アイルランド農業を担う人たちの

終章 家畜増え、民失う小さな島国アイルランド

表示価格は税込

鈴木英明（国立民族学博物館准教授）編

移動の文明誌

「自由」と

「不自由」の狭間で

2月刊行

A5判上製・四六四頁／定価九、九〇〇円



人類史に刻まれるさまざまな移動から日々の何気ない移動まで、それは望んだ移動か、はたまた強制された移動か？

私たちは人々の「移動」に対して、大なり小なり「自由」「不自由」と結びついたイメージを付与している。本書は移動を、関係性の構築・再編の契機と捉え、人の具体的な移動を多様な学問的手法と問題関心で解剖していく。そうすることで、私たちが移動に対して抱く感覚はグラリと揺らぎ、多面的に問いなおされるであろう。

石川義宗（長野大学教授）著

シェーカー教徒の思想とデザイン

祈りの中の家具と建築

3月刊行



A5判上製・二九四頁／定価七、七〇〇円

——手を仕事に、心を神に捧げなさい。

シェーカー教の教徒たちは、独自の教義に基づいた自給自足の修道生活をしながら、きわめてシンプル（簡素）な家具や建築を自らの手で生み出した。そのデザインは20世紀に入ってからモダンアートやモダンデザインの文脈で見直されたが、彼らの生活や信仰と切り離されたものとして評価されてきたのではないだろうか。最小限のもので築き上げられた村で、シェーカーたちは何を思い、何を生み出したのか。本書は、シェーカーが書き残した教義などを読み解くことで、彼らの家具や建築が祈りの表現であったことをデザイン学の観点から論じるものである。

【目次】

序章	移動を問い直す	
第一部	移動を生み出す力学	
第1章	労働のインシアチブと稼移移民・トランシルヴァニアの山村から	（鈴木英明）
第2章	ヨーロッパにおけるジプシー／ロマの移動とホーム	（杉本 敦）
第3章	フランスに暮らすロマ移民とマヌーシュを事例に	（左地亮子）
第4章	「移民の世紀」における西アフリカ	（小林和夫）
第5章	カンビアにおける落花生輸出と移住労働者の事例から	（三島積子）
第6章	自由をまたぐ移動・西アフリカのソニンケの人びと	（池谷和信）
第7章	アフロユーラシアにおける牧畜民の移動／ソマリを事例を中心に	
第二部	移動が生み出す関係性	
第8章	近代華工の実践／「フラクティス」を通して自由／不自由の再考	（園田節子）
第9章	故地と移動先とのせめぎあい	（田中鉄也）
第10章	インドの商業集団マールワリーとその自画像の諸相	
第11章	海を渡るといふこと——四世紀のイエメン・ラースール朝の裁判官と大宦官	（馬場多聞）
第12章	出土遺物からみる人とモノの移動／カフイル・カラ遺跡出土資料を中心に	（寺村裕史）
第13章	ユラシア東方における外来人エリートと「移動」と「自由」	（向 正樹）
第三部	「移動の自由」再考	
第14章	「航行の自由」をめぐる抗争としてのジェンキンスの耳戦争	（薩摩真介）
第15章	奴隷交易廃絶活動がもたらすもうひとつの自由／不自由	（鈴木英明）
第16章	一九世紀インド洋海域における航海者と船籍問題	
終章	移動は人を自由にするか／「自然」を介した「自由」と「移動」の概念再考	（新免光比呂）

【目次】

まえがき	
序章	
第1章	指導者の眼差し
第2章	楽園の様相
第3章	省察と問い直し
終章	
参考文献	
索引	

松田利彦・陳延漢責任編集
通堂あゆみ・やまだあつし・鄭駿永編集委員

植民地帝国日本と

グローバルな知の連環

—日本の朝鮮・台湾・

満洲統治と

欧米の知

3月刊行

A5判上製・六七二頁／定価 一五、四〇〇円



日本本国と植民地台湾・朝鮮、「満洲」で形成された帝国の知は、西欧の知といかなる連環性をもっていたのか。知識人による欧米の新思想の受容と利用、植民地大学での学知生産と現地社会との関係、そして解放後の知の再編などの、ひとつひとつの事例を追っていくことで、西欧の知と帝国の知の交錯、そして西欧の知を淵源とする日本人と被支配民族の知の対抗／協調／変奏関係を読みとく。

多様な専門をもつ18人の論者が、それぞれの視点から帝国日本の知の歴史とその世界史的意義を考えた国際日本文化研究センター共同研究の成果。

【目次】

序

第一部 研究の現状と本書の梗概

植民地期朝鮮とグローバルな知の連環—研究の現状

〔知〕で台湾を世界と結ぶ—近年台湾史の研究成果を手掛かりに要旨 (松田利彦・陳延漢・通堂あゆみ・やまだあつし・鄭駿永)

第二部 日本本国における知の形成と植民地

近代日本精神医学にみる音楽療法の諸相と連環
近代日本における衛生統計調査の射程—東亜研究所『東亜諸民族の死亡に関する衛生統計的調査』(二九四三年)の成立背景 (光平有希)

第三部 科学と帝国主義

鳥居龍蔵の民族誌と学知の発信
帝国の藻類学—岡村金太郎の朝鮮産海藻研究 (中生勝美)

日本統治期台湾林業と植物学—ドイツ林学とアメリカ・ロシア植物学の交錯を中心に (石川亮太)

第四部 植民地医学の形成と展開

蛇毒と寄生虫—北島多一、高木友枝とその周辺
日本帝国における血液型と指紋をめぐる人類学的関心—法医学者・古畑種基による研究を手がかりに (松田利彦)

満洲移民と栄養研究—安部浅吉と紫藤貞一郎による主食研究を手がかりに (高野麻子)

第五部 植民地大学における知の生産
京成帝国大学予科—ふたりの自然科学者—森為三と竹中要にみる近代日本植物学研究の進展と「帝国」の学知 (福士由紀)

戦前・戦時期のアジア論と日本社会科学者の植民地経験—京城帝国大学時代の森谷克己を中心に (通堂あゆみ)

風土と科学—富士貞吉に見る衛生学と植民地台湾の服装改良 (周南雅)

第六部 植民地現地の知と被支配民族
裏面の近代史—日朝における関妃の伝記 (顔吉如)

「植民地」官僚の統治認識—樺太と南洋 (森岡優紀)

林茂生における「帝国主義」と「植民地」—言説上の同盟—対抗関係に着目して (加藤道也)

ウィリアム・E・グリフィスの植民地主義と朝鮮—キリスト教ネットワークと知の連環 (駒込武)

コリアリズム教育に対する批判としての民主主義教育?—吳天錫のコロンビア大学博士論文と民主主義教育論のグローバルな連環 (李省展)

義教育論のグローバルな連環 (鄭駿永)

表示価格は税込

佐野真由子編

万博学

万国博覧会という、

世界を把握する方法

3月2刷出来

B5判上製・五五六頁／定価 九、三五〇円

万博学研究会編



万博学

Expo-logy

創刊号／第3号

【電子版有】

A5判並製・各約二〇頁／
定価 創刊号・第2号：二、二〇〇円

第3号：二、七五〇円

ベーター・パンツァー、杏澤宣賢、宮田奈奈編【好評増刷】

1873年ウィーン

万国博覧会

―日頃からみた明治日本の姿

従来の殖産興業政策への貢献
という評価にとどまらないウ
ィーン万博像を描出する。

定価 九六八〇円

万博学



万博学、それは万国博覧会という研究対象を通じて可能に
なる、大きな学際的人間学の営みである。

19世紀半ばに始まり、今日につづく世界最大の公式催事、
本書は32本の論考で、万国博覧会のさまざまな側面に着眼し、
掘り下げたその先に、人類世界の歩みを浮き彫りにする。
万国博覧会とは「世界を把握する方法」なのだ。

第2号【特集】万博と冷戦

戦後万博シリーズの第2弾。「万博とは世界を映す
鏡である」という万博学の立場から、ブリュッセル
(1958年)、モントリオール(1967年)、大阪(1
970年)など冷戦期に開催された万博と東西両陣
営とのかわりを論じる多様な角度の論考で、万博
に映った冷戦の時代を活写する。

第3号【特集】大阪万博前後の世界

日本で万国博覧会が語られるとき、当然のように
70年大阪万博が中心に据えられる。今号ではそう
した見方を相対化し、前後する時期に開かれた一
連の万博を視野に収め、この時代をとらえなおす。
「戦後万博特集」の第3弾。

寺本敬子著【好評5刷】

パリ万国博覧会と

ジャポニズムの誕生

開催国フランス、参加国日本、
パリの観衆、三者の相互作用を
通じてジャポニズムの誕生を解
き明かす。

定価 七、一五〇円

表示価格は税込

並木誠士（京都工芸繊維大学特定教授）著

近代日本における

「絵画の変」

―洋画の流行から

デザインの
導入まで

2月刊行

A5判上製・四三六頁／定価七、一五〇円

鶴岡明美（昭和女子大学教授）著

『江戸の実景を記録する

―イメージの背景と

そのゆくえ（仮）』

今夏刊行

A5判上製・約四〇〇頁／
予価 一一、〇〇〇円



明治維新を契機に、日本絵画には重大な「転換点」が訪れた。

それは、たんに新技術としての洋画の輸入に留まらず、美術館の出現や近代的な展示方法による鑑賞場の変化、裸体画・戦争画といった新しい画題の登場、あるいは絵画的な装飾が施された伝統産品の輸出振興を目標む産業界の動向など、多岐に渡るものであった。こうした絵画をめぐるさまざまな変化は、相互に関連し合い、また、それぞれが伏流のようなかたちで結びついている。

本書では、従来の絵画史研究では等閑視されがちであった、新都・東京

に對する古都・京都の動向、ならびに洋画からデザインへの展開というふたつの軸を設定したうえで、これら近代日本における絵画をめぐる変化を「絵画の変」と捉え、当時の資料を繙きながらその様相を明らかにしてゆく。

【目次】

はじめに

第1章 転換期としての一九世紀

第2章 日本画と洋画

第3章 あらたな絵画鑑賞の場

第4章 初の官設展覧会―文部省美術展覧会（文展）

第5章 写実をめぐる近代

第6章 新しい画題の誕生

第7章 図案からデザインへ

総括―あるいは、浅井忠のいた近代

写生の技法が向上し、よりリアルな表現が追求された江戸後期、実際の風景を見たまに写しとろうと試みた作品群が遺されている。本書が「実景図」と称して分析するこれらの作例は、時に険しい旅路において描かれたものであり、その描写の背後には、絵師の視点や画風の流行のみならず、公の事業や時の為政者の存在があったはずである。一方で、これら実景図と地理情報を提供する絵図との境界は曖昧であり、美術史学においては個別の作例への言及に留まる傾向にあった。本書は、実景を描いた作品群の背景にある権力関係を探り、地誌編纂事業や幕府の対外政策といった多彩な視座から読み解くことで、近世の文化の諸領域を横断する知の営みを描き出し、画派という括りでは見えてこなかった近世絵画史の一樣相を浮かび上がらせることを試みる。

表示価格は税込

高木博志編

近代京都と文化

「伝統」の再構築

2024年12月2刷出来

A5判上製・六八八頁／定価 六、六〇〇円



「京舞妓」、「おもてなしの文化」、「雅な貴族文化」など、バラ色の表象がひしめく京都文化。だがこれらの京都イメージは、近現代を通じて、政治的・社会的に、近世以来の「伝統」を基にしながらも再構築し創り出された側面が強い。本書では、近代京都をめぐるさまざまな文化を研究対象に取り上げ、その歴史の淵源を探るとともに、既存の観光言説や「京都文化」論の相対化を試みる。

並木誠士編

近代京都の美術

工芸Ⅱ —学理・応用・経営

A5判上製・
六〇八頁／
定価
一三、二〇〇円



経営

幕末の開国以来、美術工芸をめぐる状況は急速に近代化を遂げる。それは現在の「芸術」のもつ流通イメージとは異なり、輸出振興や産業の活性化と密接に結びついた様相を示していた。本書の舞台となる京都でも、美術工芸をめぐるつぎつぎと新しい動きが勃興する。しかし京都の動きは必ずしも中央政府の動向と連動しているわけではなく、地場の人びとの牽引により、独自の近代化路線を模索していた。これを京都の革新性と捉えることもできるが、しかしそれは同時に、

天皇の東幸という「事件」からいかに立ち上がり、前近代から受け継がれてきた伝統産業といかに折り合いをつけるかという苦節の道程でもあった。本書では、そうした京都特有の時代状況下で展開した近代美術工芸の世界を、「学理」すなわち当時最新の化学知識の導入と、その伝統工芸への「応用」、そしてそれらの制作者をとりまく場の「経営」という3つの観点から、総合的に描き出すことを試みる。

並木誠士編

近代京都の美術工芸 —制作・流通・鑑賞

近代京都の美術工芸研究を更新し、その作品や資料の評価、位置づけを問い直す論集。

定価 二二、一〇〇円

高木博志編

近代日本の歴史都市 —古都と城下町

「都市の歴史性」をキーワードに行われた、京都大学人文科学研究所・共同研究「近代古都研究」班の成果。

定価 一三、二〇〇円

丸山宏・伊從勉・高木博志編

近代京都研究

歴史都市・京都は、近代に大きく変わったまちであった――。

定価 九、九〇〇円

矢野貫一著

小絵馬順礼 全二冊(夢之巻・幻之巻)

国文学者・故矢野貫一氏が京都とその周辺、および台湾の社寺の小絵馬を取り上げるエッセイ集。

定価 三、〇〇〇円

[Shibunkaku Works]

[オンデマンド版]

[Shibunkaku Works]

井戸美里（京都工芸繊維大学准教授） 編

名所の誕生——「名」を与えられた風景

3月刊行

A5判上製・二七二頁／定価 八、八〇〇円



「名所」は最初から名所であつたわけではない。それでは「名」はいつ、誰によつて与えられたのであろうか。たとえば、和歌に詠まれた歌枕や、遠くの景勝地を模した

「見立て」の名所、社寺や霊場といった巡礼地、漁村の生活風景、植民地期の朝鮮等々……「名所」は多彩である。時代の変遷とともに、文化・宗教・政治などさまざまな要因が絡み合い、さまざまな場が名所となり、文学・絵画作品や紀行文、案内記、写真などに写し取られてきた。

本書では、そうした史料資料をもとに、それぞれの土地が「名所」となる過程を明らかにすることで、「名所」のなかに時代や土地を超えて存在する普遍性、「名」の本質を探る。

小野芳朗著

風景の近代史

A5判上製・三四八頁／定価 四、九五〇円



中川理・空想から計画へ編集委員会編

空想から計画へ

——近代都市に埋もれた夢の発掘

A5判上製・七五〇頁／定価 一四、三〇〇円



〔目次〕

（井戸美里）

I ことば——見立てられる名所

平安時代に描かれる中国の「名所」
（武満謙）
山水と見立ての構造——琵琶湖が名所になるとき（井戸美里）

II 物語（ナラティブ）——記憶がつくる名所

記憶風景の名所——『平家物語』にみる安元の大火（117

）の語り

最後の札所——坂東三十三所と那古寺（林かおる）

III 風俗——営みがつくる名所

浅間大社蔵富士曼荼羅図の位置づけ——名所風俗図の成立をめぐる（並木誠志）
近代鎌倉における名所風景へのまなざし（赤松加寿江）

IV 都市——開発される名所

幻の名所——大阪城公園と離宮計画（小野芳朗）
写された名所——植民地朝鮮の写真葉書と「芸術写真」を中心に（金桂園）

V 接触——近代化する名所

名所を作る——明治期京都の都ホテル（福永愛）
風景と景観の使われ方の変容（中川理）

都市計画の実現、国立公園の設置など、行政はさまざまな要請から風景の編集を企図する。その周辺には風景に価値付けする学者たち、郷土を愛する地域の住民、観光業者などがいる。風景に関わる人々はじつに多様だ。誰が風景を編集するのか、そして風景は誰のものかを考える。

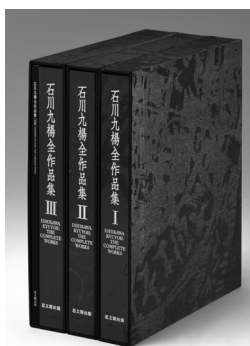
都市計画史とは、最初の企てを「空想」として見立てれば、それが実際に都市空間に落とし込まれて、現実の「計画」となっていく過程だと捉えられるのではないか。その過程にこそ、近代都市史研究の根幹をなすテーマが見出せるのではないか。この編者の認識を「お題」に集められた25本の論考。

石川九楊全作品集

ISHIKAWA KYUYOH:

THE COMPLETE WORKS

全三冊・附冊



B4判変形上製・総約二二〇頁／定価 二二〇,〇〇〇円

書家・文学者という2つの側面から、書表現の可能性や日本語の在り方を追求してきた石川九楊（1945）。本書は1963年から2023年までの間に制作された、現存作品または資料（写真・図版等）により確認可能なすべての作品を収録した。

「書は、筆と紙の間に生じる接触、摩擦、離脱による『筆蝕』^{ひっしやく}の劇^{ドラマ}である」^{（作品）}ことを見出し、書表現の極限を追求し続ける制作者・石川九楊のすべてを収めた作品集。さらに充実した附録、論考で、その多彩な表現や活動、魅力に迫る。（日・中・英語表記）

【目次】

【第1冊】

はじめに 表現の永続革命——
全作品集に寄せて（石川九楊）

（作品）

1960-1970年代

1980年代

歎異抄

良寛詩

徒然草

伊勢物語

【第2冊】

（作品）

1990年代

葉隠

枕草子

源氏物語

2000年代

孟千字文

【第3冊】

（作品）

2010年代以後

河東碧梧桐句／妻へ

【附録 一】

揮毫／書初（一九八五～二〇一三）

／伊勢物語 帯・着物

十二か月シリーズ

サイン集

【論考】

石川九楊——筆蝕の魅力

（高階秀爾）

筆蝕のドラマ——石川九楊の

世界（建畠哲）

石川九楊のリゾーム的世界

（ツベタナ・クリステワ）

【附録 二】

書の領域と表現の可能性

（石川九楊）

関連団体

個展・出品展覧会一覧

全著作目録 附・書影一覧

略年譜

印譜

【別冊】

作品目録／索引

思文閣グループの
逸品紹介

美^び の 縁^{よすが}



★
葛^{かつ}由^ゆ仙^{せん}人^{にん}

小^こ杉^{すぎ}放^{ほう}庵^{あん}

初め未醒と号し、洋画家としてキャリアをスタートした小杉放庵は二〇代半ば頃から和紙、絹布、岩絵具を用いた制作を始める。昭和期に入ると専ら日本画家として画壇で活躍、枯淡味溢れる水墨、淡彩作品を数多く残した。本作は洋画から日本画への移行期、未醒落款の作品である。

葛由は『列仙伝』に伝えられる周代の仙人。ここでは青い目に鼻筋の通ったいかにも西洋人風の顔立ちで描かれる。自ら彫った木の羊に乗り、後に続いた者をみな仙道へ導いたという葛由の逸話が、仔羊を連れ祭服を纏ったキリスト教の宣教師に重ねられているのであろう。

画面には、東洋的浪漫主義を支柱として西洋美術との比較に耐えうるだけのエスプリを模索した明治大正期における日本美術の歪みが、象徴的に現れている。当時流行の最中にあったキュビズム的な岩肌の表現、点苔や米法を思わせる葉や流水の筆致、非科学的に整理された遠近感、そして過度にデフォルメされた道釈人物。画面上に進む和洋の混淆からは、写真／自然主義の解体と表現主義への移行という時代の潮流そのものを脱臼させるような視点が感じられる。洋画家であり、日本画家、そして何より文人であった放庵の洒脱な企みを味わいたい。



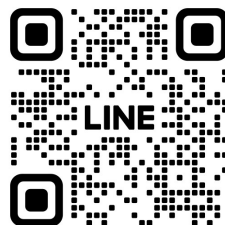
思文閣グループ採用情報

随時更新しております。
詳細は下記連絡先へお問い合わせください。



075-531-0001
saiyo2026@shibunkaku.co.jp
<https://www.shibunkaku.co.jp/recruit/>

思文閣大入札会 LINE 公式アカウント



大入札会に関わる情報発信のほか、
作品コンディション等をお問合せいただく
窓口としてご活用ください。

SHIBUNKAKU
思文閣

思文閣古書資料目録



百さへつり
全一帖

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・
錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っており
ます(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問
い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL (075) 752-0005 FAX(075)525-7155
<https://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp

自費出版のご案内

思文閣出版の自費出版レーベル
「Shibunkaku Works」
思文閣出版が培った学術書制作のノウハウを
活かして、ご研究の書籍化をお手伝いいたします。
詳細は小社までお問い合わせください。



京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL (075) 533-6860 FAX(075)531-0009
<https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/>
pub@shibunkaku.co.jp